

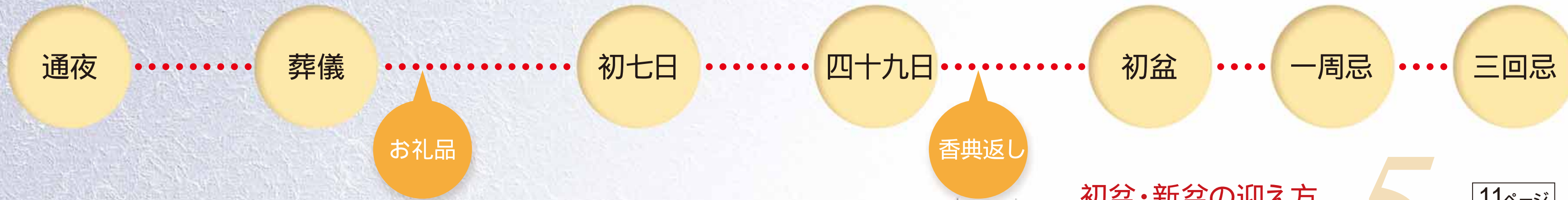
お通夜から三回忌までの返礼選びがわかる

保存版

仏事マナー読本

葬儀にまつわるお返し的心得

大切な人の突然の不幸に接したとき、気が動転して何から手をつければいいのか分からなくなります。ここではお通夜から三回忌法要までを取り上げて、参列いただいた方々に失礼のない返礼選びを含めて、いろいろなすべき手順や作法をご紹介します。



香典返しとマナー

9ページ

いただいた金額に応じて準備するのも大変なので、3段階くらいにわけて品物を用意すると便利です。そして香典返しは、忌明けに送るようにしましょう。

ワンポイントコラム 包み方と水引・表書き 内のしと外のし
 忌明けに添えるお礼状(挨拶状)について 香典返しについて



1 通夜・葬儀返礼品・お礼品

3ページ

通夜や葬儀にご参列いただいた方々にお香典返しとは別に会葬礼状とともにお渡しする通夜・葬儀返礼品。また、通夜・葬儀の受付など、お世話になった方々や町会長さまにお渡しするのがお礼品です。

ワンポイントコラム 葬儀と告別式の違い 念珠 焼香の仕方 精進落とし 挨拶回り
 香典袋(仏式)の水引と表書き



2 初七日法要について

5ページ

葬儀のあと、初めて営む法要が初七日です。死亡日を含めて七日目に行いますが、最近では葬儀当日に執り行うことが多くなってきています。

ワンポイントコラム 一般的な引出物の意味
 法要に招く範囲 お礼の言葉



ワンポイントコラム 形見分け 閻魔大王の裁判 法要の席順 「忌服」の意味
 「忌服」の期間 後ろ飾りを片付ける、白木の位牌から黒塗りの本位牌へ

3 四十九日法要について

7ページ

四十九日の法要は、「忌明け」といい、それまでの1週間ごとの法要は略しても、この四十九日だけは略せない重要な法要とされています。主だった親族に集まっていただきましょう。



4 一周忌について

13ページ

亡くなられて1年目の命日が「一周忌」で、祥月(しょうつき)命日です。一般に、この日までが「喪中」とされています。引出物は、法要が終わってからの宴席でお渡ししましょう。

ワンポイントコラム 一周忌法要の期日 服装 おとき(お斎) 墓地在り場合は手配を



5 初盆・新盆の迎え方

11ページ

亡くなられて最初に迎えるお盆。お参りいただいた方々には返礼品と一緒に礼状を添えてお渡しします。しかし、初盆のお返しは後日、また改めてということがないので、それなりのお返しを用意して当日に済ませましょう。

ワンポイントコラム お盆が四十九日より前のときは 四十九日を過ぎたら... 初盆の提灯 精霊棚
 初盆の服装のマナー お盆の時期 お墓参り 盆花 おとき きゅうりとなすの意味



6 三回忌について

14ページ

亡くなられてから満二年目に営まれる法事を三回忌といいます。故人の冥福を祈り、その思い出を語り合う大切な法要です。出席していただいた方に対して引出物をお渡しするようにします。

ワンポイントコラム 三回忌まではインド・中国の習慣 三回忌以降の法要
 三回忌の数え方 法要はいつまで



7 チェックリスト

15ページ

葬儀や葬儀後には、いろいろな手続きやしきたりなどがあります。イザというときに役立つ情報をご紹介します。

通夜・葬儀返礼品・お礼品

通夜・葬儀の粗供養

粗供養とは

通夜や葬儀にご参りいただいた方々に感謝とお礼の気持ちを伝えるためのお返し。香典返しとは別に会葬礼状とともにお渡します。あらかじめ人数を予測してその分を用意しておきましょう。



ワンポイントコラム

葬儀と告別式の違い

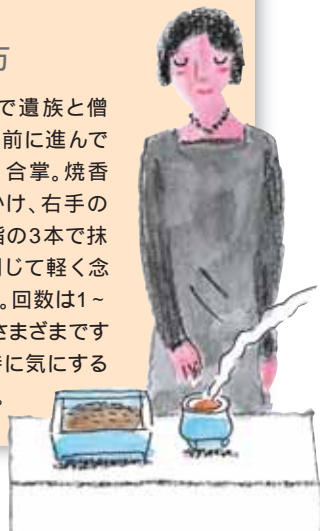
本来は「葬儀」と「告別式」は区別して行われていました。葬儀は故人の冥福を祈り、成仏することを願って遺族や近親者が故人を葬り、浄土に導く引導を渡すために営む儀式で、正式名称を「葬送儀礼」といいます。一方、告別式は葬儀を終えたあとに友人、知人、近親者、勤務先の関係者などが故人と最後の別れをする儀式のことです。土葬から火葬に変わった現在では、参列者が墓地まで行って別れをする機会がなくなるなど、葬儀そのもののしきたりが変わってきました。そのために葬儀と告別式を同時に行うのが一般的になり、告別式参列者も焼香をするという会葬で故人と別れをする形式になってきています。

念珠

神式やキリスト教の場合は必要ありません。数珠は人間の百八つの煩惱を除くという意味から、108個と、その半分の54個、54個と同じ長さで大きめの玉を使った27個があります。女性は54個が一般的なようです。

焼香の仕方

焼香台の少し手前で遺族と僧侶に一礼。焼香台の前に進んで遺影を仰いで一礼、合掌。焼香は、数珠を左手にかけ、右手の親指、人さし指、中指の3本で抹茶をつまんで目を閉じて軽く念じながら焼香します。回数は1~3回と宗派によってさまざまですが、一般参列者は特に気にする必要がないようです。



会葬礼状を添えて

ご参りいただいた一人ひとりに、お礼の言葉を述べることは当然のことですが、通夜や葬儀当日には不可能に近いといえるでしょう。そのために会葬礼状をお渡しして意を尽くし、粗供養品とともにお渡します。

ワンポイントコラム

精進落とし

僧侶や親族、お世話になった方々に、酒食のふるまいとしての宴席。祭事の期間中や葬儀(精進の期間が終わり)で、もとの生活に戻るときに、生臭い肉や魚を食べたり、酒を飲んだりして、区切りをつけたのが始まりといわれています。



通夜・葬儀でお世話になった方々へのお礼品

通夜・葬儀の受付など、お手伝いやお世話になった方々にお礼の気持ちをお渡しする品物です。葬儀後なるべく早くお伺いしてお礼を述べましょう。グループでお手伝いいただいた場合は、全員で分けられるお菓子や品物などを、個別の場合は1,000円前後の品物を返されている方が多いようです。

通夜とは

遺族・親類縁者が集まって故人に付き添い、静かに過ごす最後の夜のこと。最近では半通夜といって、夜6時頃から1時間ほどの通夜式を行うことが多くなっています。自宅で通夜を行う場合は、受付の人を決めて甲問者の名前を記帳していただく用意をしておきましょう。



会葬礼状の流れ

- ① 手配** 故人との続柄は、喪主からみた関係を...「亡父」「亡祖父」などと書きます。通夜・葬儀に手渡しする場合は、宛名不要。およその数を計算し、会葬予定者の数よりも多めに手配をしましょう。
- ② 渡す** 通夜・葬儀の参列者が記帳終了後にお渡しします。香典のあるなしにかかわらず、会葬へのお礼としてお渡しします。
- ③ 送る** 葬儀に参列できずに甲問だけの方には、お礼状を送ります。葬儀に参列できずに、供花、お供物などをいただいた方にも、お礼状を送りましょう。できれば会葬礼状とは文面を変えて手書きで。葬儀が終わってからなるべく早く出しましょう。



会葬礼状・葬儀のお礼状の文例の流れ

故人の名前	「亡祖父 儀」と「故 儀」という書き方があります。社葬の場合には後者をアレンジし、「弊社社長 故 儀」といった形で使います。
お礼の言葉	忙しい中を参りいただいたことへのお礼の言葉を入れます。
お礼状はあくまでも略儀	本来なら直接お礼を申し上げるところ、書状でのご挨拶となった旨を伝えます。
差出人	喪主の名前を書きます。横に「親族一同」と書き添えます。
その他	季節の挨拶文は不要。

粗供養の金額・選び方

人数や品物によって大きく変わりますが、通夜や葬儀にご参りいただいた方々に1,000円~500円程度の品をお渡しするのが一般的なようです。お通夜ではお茶や砂糖、葬儀ではタオルやハンカチといった品が多いようですが、最近では通夜と葬儀に同じ品を渡される場合も多くなっています。例えば、砂糖やお茶、石鹸、ハンカチーフなどの日常的な品物が選ばれています。

- ①** ハンカチ(タオルハンカチを含む)
 - ②** スティックシュガー
 - ③** お茶
 - ④** 石けん
 - ⑤** ボールペン
- 粗供養で選ばれるベスト5



ワンポイントコラム

挨拶回り

葬儀でお世話になった近隣の方や世話役代表、葬儀委員長、寺社や教会などへの挨拶回りは、葬儀の翌日か翌々日に済ませましょう。個人の恩人や勤務先など少し離れたところへは、先方の都合を伺った上で、遅くとも初七日までに直接挨拶に向くのが礼儀です。

香典袋(仏式)の水引と表書き

黒白、または銀の結び切りの水引を使います。表書きで各宗教に使えるのは「御霊前」です。「御仏前」は、四十九日の以降の法事用なので、ご注意ください。



初七日法要について

亡くなった日から数えて七日目に営む、死後初めての法要です。葬儀の三・四日後にあたるため、遠方から来ていただく方などのことも考慮し、最近では葬儀当日、火葬場から帰って来る遺骨を迎える「還骨勤行」の儀式とともに法要を営まれることが多いようです。

引出物の用意

初七日法要の参列者の方には、お帰りのときに黒白、または銀一色の水引に「志」粗供養などと表書きをした引出物をお渡しします。引出物には、お茶や洗剤などの日用品が多いようですが、荷物になるので参列者の好みで選べるカタログギフトも増えてきています。1世帯に1つつ用意するのが一般的なようです。

初七日とは

亡くなった日から数えて七日目に営む、死後初めての法要です。故人が成仏できるようにと願う大切な儀式。家族や親戚、知人などが集まり、僧侶による読経や参列者による焼香で故人の冥福を祈ります。仏教では人が死ぬと七日ごとに生前の所業を閻魔大王に裁かれ、四十九日目に判決が言い渡されるといわれ、その裁判の日を忌日と呼びます。初七日は最初の忌日になり、葬儀後、最初に行われる大事な供養です。また、このときに今後の法要、納骨などの日時を決めておくようにします。

初七日法要の手順



後飾り壇(後飾り壇は小さな祭壇で、忌明けの四十九日まで飾ります)に火葬場から持ち帰った遺骨と位牌、遺影、遺骨を安置したあと、僧侶の読経を拝聴します。

ワンポイント コラム

法要に招く範囲

初七日、四十九日、一周忌までは、親族、故人の親しい友人、知人、会社関係者の方々を招くのが一般的ですが、三回忌は関係の深い人だけを、それ以外の法要は身内だけで済ませます。

お礼の言葉

葬儀当日と初七日の精進落しの席では、始めと終わりに列席の方々に対して、喪主が、それに準ずる方がお礼の言葉を述べます。
<始まりの挨拶例>
本日は、皆さまお忙しいところ、亡き のためにお心づくしを賜り、誠にありがとうございました。

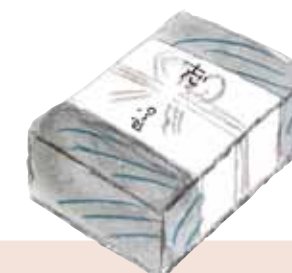
お陰さまで滞りなく、 を済ませることができて、 も大変喜んでいことと存じます。お口よごしてございますが、さやかな贈をご用意いたしておりますので、どうぞお召し上がりくださいませ。本日は、どうもありがとうございました。
<切り上げの挨拶例>
本日は、皆さま、大変お疲れのところ、お引き止めいたしまして申し訳ございませんでした。



焼香
まず親族が焼香し、それから弔問客に焼香していただきます。



精進落し
法要終了後、一同に茶菓や料理をふるまいます。



最後に、喪主が親族・お手伝いの方にお礼を述べ、法要の引出物などを渡します。

法要

仏式の場合

葬儀が終わったあと、特定の日や年を決めて故人を追悼する法要(法会、法事とも)を営みます。故人の追善供養のため、日を決めて寺院や自宅、霊園、あるいは墓前で法要が営まれ、そのあと、出席者に茶菓や精進料理をふるまいます。別に宴席を設けることもあります。初七日、14日目を二七日(ふたなぬか)、21日目を三七日(みなぬか)、28日目を四七日(よつなぬか)、35日目を五七日(いつなぬか)、42日目を六七日(むつなぬか)、49日目を七七日(しちしちひ)といい、これをもって「忌明け」とします。

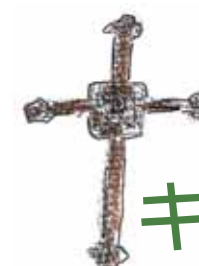


地域によって異なる場合がございます。



神道の場合

仏式の法要にあたるものを、神式では「霊祭」と呼び、葬儀の翌日、霊前に奉告する翌日祭(現在は、ほとんど行われていないようです)から、十日祭~五十祭までの十日ごと、その後は百日祭と一年祭に祭祀を行うのが一般的です。特に十日祭、五十祭、百日祭は、近親者や友人・知人を招いて盛大に祭祀を行います。五十日祭を迎えた翌日は「清祀の儀」として、神棚の白紙を取り去って平常の生活に戻ります。また五十日祭後、都合の良い日を選んで故人の霊璽(位牌にあたるもの)を祖霊舎に移して祀り(合祀祭)玉串料をいただいた方々に忌明けの挨拶をします。その後、自宅に人を招いて行う祭祀は、一年祭、二年祭、三年祭、五年祭、十年祭が多いようです。



キリスト教の場合

カトリック
故人の死亡日から3日目、7日目、30日目、1年目(昇天記念日)に、教会で「追悼ミサ」を行います(3日目、7日目は、省略されることが多いようです)。ミサのあとは、自宅などで茶話会を開いて故人を偲びます。また、毎年11月2日は、万霊節(死者の日)として教会聖堂で追悼ミサが行われています。
プロテスタント
死亡後1ヵ月の昇天記念日に記念式を行います。教会や墓前で行うこともありますが、ほとんどは牧師や友人を自宅に招いて行うことが多いようです。祈りのあと、茶話会でもてなします。これ以降は1年目、3年目、5年目の召天記念日に記念式が行われるようです。

ワンポイント コラム

一般的な引出物の意味

お茶	お茶を飲みながら故人を偲ぶという意味を込めて、香典返しにする習慣が残っています。
砂糖	仏の世界へ白装束で旅立つという意味と、慈愛を表す意味で利用されます。また消耗品であることから先様へ不幸が及ぶのを消滅させるという意味合いから使われています。
シーツ・タオル 綿布	仏事では、仏の世界への旅立ちに白装束で旅立つという意味から晒しが利用されていたそうです。その流れがシーツ・タオル・毛布へとカタチを変えて、現在に引き継がれています。
石けん	不幸を洗い流すという意味と実用品として喜ばれるということで選ばれています。
家庭金物	光りものは、昔から魔除けとして用いられていた風習からステンレス、アルミ、銅製品などが利用されます。
陶器	昔、埋葬していたという習慣から、人間は土に帰るという意味を含めて選ばれています。
漆器	不幸を塗りつぶすという意味合いと、白木(白装束で仏の世界へ旅立つ)から色直しをするので、二度と不幸が起こらないように願いを込めて選ばれています。

四十九日法要について

遺族、近親者、知人が集まり、忌明けの法要を行います。仏教では、死者が生まれ変わる世界が決定するといふ日です。いつも以上に心をこめて冥福を祈りましょう。

引出物の用意

以前は、5～6ページで紹介した品が多かったのですが、最近では、海苔やお茶、お菓子などの食品や日用品が多く選ばれているようです。金額の相場は5,000円～3,000円程度。持ち帰っていただくことを考えると重いものや大きいものは避けたい方が良いでしょう。また、好きな品を選ぶことができ、荷物にならないカタログギフトも人気を集めています。引出物ののしの表書きは「粗供養」「志」などとし、水引は黒白か銀の結び切りを用います。

四十九日法要とは

昔から人が死ぬことを「往生(おうじょう)」といいますが、これは「往(ゆきて生まれる)」という意味。亡くなったときから死出の旅が始まり、四十九日後に他の世界に往って生まれ変わるといふ言い伝えにもとづいているそうです。この四十九日の間を中陰(ちゅういん)(中有(ちゅうう))といいますが、これは現世と来世の間という意味で、死から新しい生へと生まれ変わるのに必要な期間で、四十九日目が満中陰です。死者の霊は亡くなった日から四十九日間は、この世とあの世をさまよっているとされています。いわば、死から新しい生へと生まれ変わる準備期間です。その間に遺族が丁寧に冥福をお祈りすることで、亡くなった人は成仏できるとされています(浄土真宗を除く)。この期間を「忌中」四十九日を過ぎると「忌明け」となり、それまで喪に服していた遺族が通常生活にもどる日といわれています。



五七日が「忌明け」の地方も

地方によっては、故人が亡くなった日から数えて三十五日目の五七日を忌明けとするところもあります。四十九日が3ヵ月目になってしまうことを「三月越し」といい、「始終苦(四十九)勞が身につく(三月につく)」からと、三十五日目に行う場合も。語呂合わせに過ぎないといわれていますが、気になる場合は、僧侶に相談しましょう。

「忌明け」の次は百か日法要

百か日法要とは「忌明け」が終わってから最初の法要で、亡くなってから百日目に行われます。出苦忌ともいい、娑婆のすべてのことから抜け出して、無の世界に入ることを示します。また卒哭忌ともいわれ、故人への悲しみのために泣き暮らしていたのを泣きやむ日を意味する日です。この法要は遺族のみの場合が多いので、四十九日法要と一緒にすることが増えてきています。挨拶や遺品の整理などの雑事は「忌明け」から、百か日法要までの間に済ませましょう。

法要の手順・流れ

故人の追善供養の儀式として営まれる法要の中でも、四十九日法要は忌明けの大切な法事として、特に丁寧に営まれます。法要当日の流れは、葬儀と違って進め方にはっきりとした決まりはありません。四十九日法要の準備としては、事前に菩提寺のご住職と相談して日取り・場所を決め、関係者に案内状を送付します。また、会食の式場と引出物の手配、本位牌や仏壇の用意などをしておきます。

四十九日法要の流れ

代表的な例



僧侶による読経のあと、参列者による焼香、僧侶の法話が行われます。納骨がこの日に行われることもあります。



法要が終わると、会食会場に移動して、参列者をおもてなしするための席を設けます。会席には僧侶もお招きします。



施主のお礼の挨拶を行います。



参列者に引出物をお渡しして解散となります。

地域によって異なる場合がございます。

ワンポイントコラム

形見分け

故人の分身という意味で「片身分け」とも書き、「譲り物」「袖分け」「裾分け」とも呼ばれます。近親者や特に親しかった人に遺品の形見分けをするのが、忌明けの頃。故人が使っていた衣類(着物、ドレス、帯など)、装身具(指輪、ネックレス、カウス、ネクタイピンなど)、趣味の道具(茶・釣り・ゴルフなどの道具、万年筆、蔵書など)など、本人の匂いがしみついているので、「垢つき」「お手汚し」などともいわれます。しかし、高価な貴金属類など、品物によっては贈与税の対象になることもありますので、注意しましょう。形見分けは包装せずにそのまま渡し、基本的には目上の人には控えます。



閻魔大王の裁判

仏教では、死者が冥土に行くとき、七日目ごとに閻魔大王を筆頭に十王によって、生前の善行、悪行を問われ、審判が行われると考えられています。この審判の日に遺族が供養することで積まれた善業が故人にも及ぶと教えています。亡くなった人のために善業を積み重ねることを追善といい、故人ができるだけ善い世界に生まれ変われるようにとの素朴な願いから、葬儀のあと七日ごとに追善供養をするようになりました。最初が初七日で、この日に故人が三途(さんず)の川の畔(ほとり)に到着するといわれています。川の流れるは激流と急流、緩流の三種類があるため、緩流を渡れるようにとの願いを込めて営む法事です。

法要の席順

法要では、故人とゆかりの深かった人が祭壇の近くに座ります。

法事・法要の会場が縦長の場合などの席次例



「忌服」の意味

「忌服(きふく)」は「服忌(ぶつき)」ともいい、一般的には「服喪(ふくも)」と呼ばれています。「忌(き)」とは、死者の穢れ(けがれ)を忌み嫌うこと。人の死は穢れたものと考えられ、死者を出した身内は、一定期間、日常生活から遠ざかり、身を慎まねばなりません。この期間を特に「忌中」と呼び、現在では、肉親の死を悲しんで謹慎する期間と考えています。「服(ぶく)」とは、喪服のこと。身内に死者があったとき、穢れた体を喪服に包んで、一定期間、行動を慎み、身を清めること。「忌」と「服」を含めて「喪(も)」ともいいます。忌服の期間を「喪中」と呼びます。現在では、「喪中」は慶事を慎む期間とされています。

「忌服」の期間

古くから忌服の制度があり、西暦七〇一年に、文武天皇の大宝律令の喪葬令が初めてといわれています。忌服の慣習は受け継がれ、明治七年に武家の忌服制に基づいて太政官布告の「服忌令(ぶつきれい)」が出され、親等別に忌服の期間が定められました。父母の場合は、忌の期間が五十日、服の期間は十三ヵ月、夫の場合は、忌が三十日、服が十三ヵ月。妻や嫡子は、忌が二十日、服が九十日と、喪の期間に大きな差があり、家長制度の傾向が強いものでした。下記の表が現在の一般的な忌引き休暇です。現在では、一般的には「忌」の期間つまり「忌中」は、忌明けまでの期間とされ、仏式では四十九日まで、神式では五十日祭まで、キリスト教式に忌明けはありませんが、一ヵ月の召天記念日までと考えられています。そして、「服」の期間、つまり「喪中」は一年間と考えるのが妥当でしょう。



一般に認められている忌引期間

続柄	期間
配偶者	10日間
父母	7日間
子供	5日間
祖父母	3日間
兄弟姉妹	3日間
孫	1日間
叔父・叔母	1日間
配偶者の父母	3日間
配偶者の祖父母	1日間
配偶者の兄弟姉妹	1日間

後 飾りを片付ける、白木の位牌から黒塗りの本位牌へ

葬儀のときに用いられる白木の位牌は仮のものなので、四十九日法要に間に合うように本位牌を用意しましょう。忌明けを過ぎた白木の位牌は、菩提寺と相談して処置します。また、遺骨を安置していた祭壇(後飾り)も忌明け後には片付けます。

香典返しとマナー

本来、香典返しは四十九日直後にお礼の挨拶に伺うものですが、現在の交際範囲の広がりや時間的な制約もあって、品物に忌明けの挨拶状を添えて送ることで感謝の気持ちを表すことがマナーとして定着しています。

香典返しの時期

仏式

仏式の場合は、四十九日法要後にまとめて発送されるのが一般的です。四十九日(七七忌)の忌明け法要を営むまでは「忌中・喪中」の期間なので、喪に服している間のお礼や香典返しは慎むのが本来の礼法にかなった答礼といえます。四十九日が年を越したり、正月の三日にかかるときは三十五日(五七忌)後に、地方によっては初七日後のところもあるようです。

香典返しには、納骨あるいは四十九日(三十五日)の法要を済ませた旨を伝え、丁重にお礼を申し述べた挨拶状や礼状を添えます。

包み方と水引: 香典返しの品物には奉書紙、半紙などに包み、弔事用の黄白または黒白の水引をかけます。表書きは上段に「忌明」または「志」、下段には送り主である喪主の姓名を書くことが多いようです。



神道

香典返しはもともと仏式のしきたりなのですが、一般的な習慣として神式でも仏式と同じようにすることが多いようです。神式では三十日祭または五十日祭を忌明けとし、挨拶状とともに香典返しをします。神式の場合の挨拶状も仏式と同じような趣旨で書けばいいのですが、「冥福」「成仏」「供養」「回向」「追善」などの用語はさけましょう。香典返しの表書きは「偲草」「志」などです。

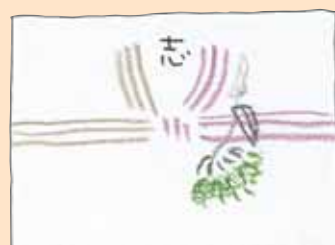
キリスト教

キリスト教には「香典返し」という習慣がありませんが、一般的な習慣として三十日祭の召天記念日に納骨を済ませ、その旨の挨拶状を添えて故人を記念する品を贈ることが多いようです。香典返しの表書きには「偲び草」「志」などで、「忌」という言葉は使いません。挨拶状には「冥福」「成仏」「供養」「回向」などの仏式用語はさけ、「急逝」「永別」「召天」「神のもとに召され」などの言葉を使います。

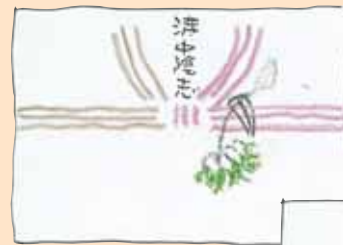
ワンポイントコラム

包み方と水引・表書き

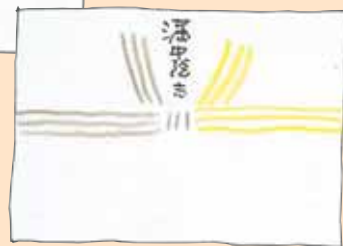
香典返しの品物は奉書紙や半紙などに包んで弔事用の黄白、または黒白の水引をかけます。表書きは上段に「志」、下段には送り主である喪主の姓名を書くことが多いようです。



香典返し用の一般的なタイプ



関西の香典返し用
(大阪以西でよく用いられる香典返しの表書き)



内しと外し

内し = 気持ちを控えめにする場合は、品物に直接の紙をかけてから包装します。
外し = 気持ちを強調したいときやお返しを持参する場合は、包装紙の上からのし紙をします

香典返しの目安

香典返しの目安は、従来のしきたりでは「半返し」といって、一般的には香典をいただいた額の半分相当を目安としてお返しをされる方が多いようです。最近では、相手の方が好みの商品を選択できるギフトカタログ(お返しの金額に応じた、それぞれのカタログが用意されています)が人気を集めています。



当日返しをされた場合

葬儀当日に当日返し(当日返礼品)をする場合もあるようです。この当日返しの場合は5,000円~2,000円くらいの品物が多いようですが、当日2,500円の商品をお返ししていた場合、いただいたお香典が5,000円であれば、当日返しで「半返し」となりますので、その後のお返しは不要となります。いただいたお香典が10,000円の場合は、半返し5,000円となりますので当日返し分2,500円を差し引くと残りが2,500円です。その分は、忌明け後にお返しをしましょう。



1 タオルセット



2 お茶



3 のり詰合せ



6 しいたけ

4 コーヒー・紅茶

7 肌ふとん・毛布

5 石けん・洗剤



8 菓子

お返し
ベスト 10

9 くつ下セット

10 茶器セット

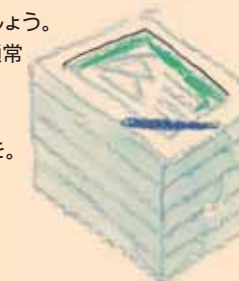
ワンポイントコラム

忌明けに添えるお礼状(挨拶状)

文中には、句読点「、」や「。」は使いません。それには以下の3つの説があります。毛筆の書状には近世まで「、」や「。」を使っていませんでした。そのためお礼状、挨拶状にも用いないのが正式、という説。葬儀や法事が滞りなく流れますようにという意味や、つつがなく終わりましたという意味を込めて、文章が途切れるような「、」「。」は使いません。そのため冠婚葬祭に関する案内状や挨拶状全般も、式や行事が滞りなく流れるように「、」「。」は使わない、という説。「、」や「。」は読む人が読みやすいようにつけられたものであり、読み手の補助をするものと考えられます。あらかじめ句読点をつけた書状を送るのは読む力を充分にお持ちの相手に対してはむしろ失礼であるという、読み手に対する敬意から「、」「。」はつけない、という説。

ご一同様でいただいた香典返し

いただいた金額にもよりますが、ご一同の皆さんで召し上げられるお茶やコーヒー、お菓子などをお返しすることが多いようです。また、タオルなどを人数分用意するのもいいでしょう。しかし、中身の金額が通常個々人にいただく金額と変わらない場合は、きちんと個別にお返しを。



必ず忌明けの挨拶状を添えて

香典返しをするときは、お世話になったことのお礼と四十九日法要・納骨が済んだこと、戒名の報告などの意味をこめて商品に挨拶状を添付します。しかし、自宅の近所で直接渡す場合には挨拶状は必要ありません。

忌明けの挨拶状は、和紙(巻き紙奉書紙)に薄墨の筆文字で手書きまたは印刷をし、奉書封筒に入れます。薄墨は涙で墨がにじんでいるように見えるため、葬儀では薄墨が一般的です。また、不祝儀に用いる封筒は、不幸が重ならないようにとの意味合いから、二重封筒は使いません。

会社で手渡しの香典返しにもお返し状を添えて

お返しのタイミングは、やはり四十九日(仏式)法要後に手渡しされる方が多いようです。しかし、葬儀後出社した初日には一言お礼を述べましょう。また、四十九日まで待たずにお返しをしたいという場合は、葬儀後なるべく早く渡します。会社の手渡しには、本人がいない場合も考慮して挨拶状を添付しておきましょう。

生花・供物・お見舞いもいただいた香典返し

香典以外にいただいた分もお礼をしたい場合は、香典金額を少し多めにいただいたつもりでお返しします。また、香典と、他にいただいた分のお返しを別々に行う場合もあるようです。

弔電の場合の香典返し

弔電には、お礼の品物をお返しされるのが少ないようです。しかし、いただいたご厚情にたいしては葬儀後、なるべく早い時期にきちんとお礼のご挨拶をしましょう。

初盆・新盆の迎え方

故人が亡くなって最初に迎えるお盆のことを初盆といいます。通常、祭壇などは八月十三日に飾ることが多いようですが、初盆のときは一〜七日までに設けて、故人の生前の好物を供えたりして念入りにしましょう。

引出物の目安と渡し方

初盆・新盆には、お参りに来られた方へのお返しや初盆法要の引出物を準備します。軽くて小さなもの、たくさんあっても困らない食品や日用品など、かさばらず、重すぎず、持ち帰りの負担にならないものが多いでしょう。例えば、タオル類やお茶、石けん、砂糖など…。表書きは「粗供養」や「志」とします。お盆の1ヵ月から1ヵ月半くらい前に葬儀の会葬者の約3分の1程度の数を準備されることをおすすめします。また、郵送などで「御供」をいただいた方には、後日「志」の品をお送りします。

お盆の由来

日本を代表する民俗文化のひとつで、先祖供養の儀式。正式には「盂蘭盆会(うらぼんえ)」といい、サンスクリット語の「ウラバンナ」の音訳です。地獄で苦しんでいた弟子の母親を、お釈迦様が供養してお救いになられたという故事に由来し、地獄に堕ちて苦しんでいる霊を救うために供養を営むことなど、由来には諸説があります。この風習が日本に伝わり、日本古来からあった先祖祭と融合し、お盆の習慣が庶民に広まっていったといわれています。

お盆の供え物

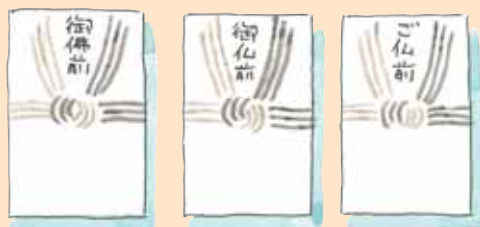
家の中に「盆棚」や「精霊棚」を設け、初ものの農作物でつくったお供え物を飾ります。供養膳には、精進料理、白玉団子、季節の野菜や果物、故人の好物なども供えます。また、なすの牛やきゅうりの馬、そして洗った米、なす・きゅうりなどをさいの目に刻んだものを混ぜて蓮の葉の上に盛り付けた水の子と呼ばれるものも供えます。



ワンポイントコラム

お盆が四十九日より前のときは
初盆・新盆とは、四十九日が過ぎてから初めて迎えるお盆のことをいいます。四十九日より前にお盆がきた場合には、初盆の法要は翌年に行います。

四十九日を過ぎたら表書きが変わる不祝儀のし袋
通夜以降、持参する香典には「御霊前」という表書きが使えますが、四十九日を過ぎると「御佛前」「御仏前」「ご仏前」という表書きを使います。



初盆の提灯

初盆の提灯は絵柄のない白い提灯を使用します。これは初盆のときだけ使い、送り火で焼却したり菩提寺に納めたりします。



初盆の服装のマナー

新盆では、施主および親族は喪服を着用する場合があります。ただし、親族のみで新盆を行う場合は、暑い時期なので地味な服装でもよいでしょう。

精霊棚

先祖の精霊を迎えるための特別な祭壇、精霊棚を仏壇の前に設けます。台の上にまこもで編んだゴザを敷いて、中央に位牌を安置し、供物を供えます。

お盆の時期

旧暦の7月13日から16日までの4日間、新暦の8月13日～16日の4日間がありますが、現在では、月遅れの新暦に行くことが多数派となり、全国的に広がっています。

お盆の準備と予定

お盆を迎える準備を始めます。盆月の朔日(ついたち) 盆月の準備は朔日から始まります。この日にあの世の釜のフタが開いて、ご先祖の霊が冥土から、それぞれの家に旅立つ日とされています。

寺院へ依頼 寺院によっては、草履や白提灯が必要な場合がありますので、事前に習慣をたずねておきましょう。

お墓の掃除 帰ってこられるご先祖の霊のために、お墓のお掃除は盆月に入ったらすぐに始めましょう。



自宅の準備 盆棚・仏具・ローソク・線香などの用意をします。盆提灯の組み立てをします。初盆の場合は、お見舞者への返礼品や新盆用の提灯の準備を。

準備 お供え物の準備などを。就寝前に仏壇の扉を開けておく地域もあります(毎日拜んでいる仏壇に盆様を迎えてはいけないとされているため、盆棚をつくるのもそのような理由からといわれています)。

盆棚は、竹または木製のものとされています。



地域によって異なる場合がございます。

朝=準備 お位牌を仏壇から盆棚に移し、仏具・御霊膳・花・ナスとキュウリの牛と馬などを供えます。お迎え提灯・お供え物・花・線香・ローソクなどを準備します。

午前=お墓参り 家族揃ってお墓参りに行きます。



お墓で線香をつけ、その火を提灯に移して持ち帰ります(この火が精霊だともいわれています)。その火を盆棚の灯明に移しますが、最近では火の始末などの心配もあり、形式的に済まされることが多くなっています。盆提灯など、最近では電気式のものも普及。

夕方=迎え火 戸外が暗くなったら、家の門口や玄関で迎え火をたきます(迎え火の習慣のある場合)。これは精霊が迎え火を目印に帰ってくるといわれているため。盆提灯の電気をつけることも同様の意味があります。

お盆中は、灯明を絶やさず 三度の食事は家族と同じものを供えます(地域によって供え物はさまざまです)。

お迎え提灯・お供え物・花・線香・ローソクなどを準備します。

墓参り 家族揃ってお墓参りに行きます。

読経 僧侶を迎えて、読経をしていただきます。

会食 宗教・宗派に関係なく、親族や故人と親しい人たちを招いて、会食をすることが一般的です。

お盆明け 御霊は午前中まで我が家に居るといわれていますので、お供え物を続けます。

送り火をたいて、御霊のお見送りをします。

夕方=送り火 戸外が暗くなったら、家の門口や玄関で「来年もお会いしましょう」という気持ちを込めて精霊を送る送り火をたきます(送り火の習慣のある場合)。

後片付け 処分したくてもできないようなものは寺院に相談しましょう。

13日(迎え盆)お盆の入り

14日~15日(盆中日)

16日(送り盆)

17日

ワンポイントコラム

お墓参り

数珠、線香、ローソク、マッチ、花、菓子、果物、半紙、水桶、柄杓、たわし、ほうき、雑巾などを用意して、お墓の掃除とお墓参りをします。



盆花

先祖の霊に供えるために用意する花で、昔は桔梗、萩、おみなえし、山百合、しきみ、ホオズキなどを山で採ってきて盆棚に供えていました。これを盆花迎えといい、先祖の霊がこの盆花に乗って来ると考えられていました。



おとき(お斎)

法事や法要のあとの食事会のこと。僧侶による読経のあと食事がふるまわれます。僧侶や参列者へのお礼の気持ちをこめたお膳を用意して、一同で故人を偲びます。

きゅうりとなすの意味

位牌の前には、なすやきゅうりで作った牛や馬を供えます。これは先祖の霊が「きゅうりの馬」に乗って一刻も早くこの世に帰り、「なすの牛」に乗ってゆっくりとあの世に戻って行くようにとの願いを込めたものといわれています。



三回忌について

亡くなられてから満二年目に営まれる法要が三回忌。遺族、親戚、知人や友人などが集まって故人の冥福を祈り、その思い出を語り合う大切な法事です。一周忌とほぼ同じ内容で行います。自宅か菩提寺で行うことが多いですが、ホテルや法要施設のある霊園で行う場合もあります。



ワンポイントコラム

三回忌まではインド・中国の習慣

三回忌までの法要はインド・中国の習慣を取り入れたもので、それ以降の年忌法要は日本で生まれたものといわれています。

三回忌以降の法要

七回忌、十三回忌、十七回忌、二十三回忌、二十七回忌、三十三回忌、五十回忌と追善供養の法要を営みます。

三回忌の数え方

「かぞえ」で数えるため、死亡年を一年として起算します。三回忌は一周忌の翌年の祥月命日となり、二年続けて年忌法要を営むこととなります。

法要はいつまで

仏教では、亡くなってから三十三年がたとどんな人でも極楽浄土に行けるとされています。そのため、年忌法要は、三十三回忌か五十回忌を持って最後の法要の「弔上げ(とむらいあげ)」とするのが一般的です。戒名を過去帳に転記し、位牌を菩提寺に納めます。

引出物は全員に用意

三回忌の参列者には引出物をお渡しします。引出物の考え方としては一周忌と同じで、お茶や故人が好んだお菓子、タオルセットなどの実用品を選んでおくとい良いでしょう。法要後に会食などを行う場合は、その費用もかかりますので、引出物として渡す場合は、手土産程度の3,000~2,000円前後が多いようです。水引は地域によって異なりますが、黒白または黄白の結び切りなどがあります。年忌法要のお返しには、会葬のお礼を込めて挨拶状を添えましょう。挨拶状は、奉書紙一枚に薄墨で書いたものを一重の封筒に入れるのが一般的です。また、法要に参列していただかなかった方でも、お香典やお供えをいただいた場合には、お礼状とともに引出物をお返しします。

三回忌の準備

当日、スムーズに進行するように、遅くとも二カ月前には準備を始めましょう。まず、住職と相談をして、法要の日を決めます。卒塔婆を立てる場合は、事前に住職に依頼しておきましょう。法要場所ですが、関東は菩提寺で、関西は自宅で法要を営むことが多いといわれています。法要を菩提寺以外で営む場合は、住職に「御布施」とは別に「御車代」を包むのが一般的です。また住職が会食を辞退された場合は「御膳料」を包む場合があります。日取り、場所が決まれば、招待客を決めて1カ月前には往復はがきで案内状を送り、出欠の返事をいただくようにしましょう。参列者の人数が確定してから、会食、引出物を用意します。法要のときの服装ですが、施主側は略礼服を着用し、数珠を忘れずに持参しましょう。

法要当日の用意・手順

三回忌法要当日の用意・手順は一周忌とほぼ同じです。

三回忌の意味

亡くなられて満二年目の祥月命日を三回忌といい、一周忌と三回忌は必ず、一人の法要を営みます。七回忌以降は、同じ年に法要が重なった場合、まとめて行ってもよいとされていますが、法要を行う日は、あとに亡くなった故人の命日に合わせるようにしましょう。

地域によって異なる場合がございます。

引出物は全員に用意

一周忌法要当日の参列者全員に引出物を用意します。引出物によく用いられるのは、タオルセットなどの日用品、お茶や海苔などの日持ちのする食品、また故人の好んだお菓子などの場合もあります。金額は5,000円~2,000円程度が一般的ようです。遠方から参列いただく方のことを考え、手荷物にならない引出物として、カタログギフトを選ばれる方も増えてきています。引出物の表書きは、どの宗教でも共通に使うことができる「志」が一般的なようです。表書きの下には、「家」と姓を入れます。水引は不祝儀用の黒白を使用する場合もあれば、双銀、黄白の結びきりを使用する場合もありますが、地域性があるため、不明な場合は地域の詳しい方に相談してみましょう。

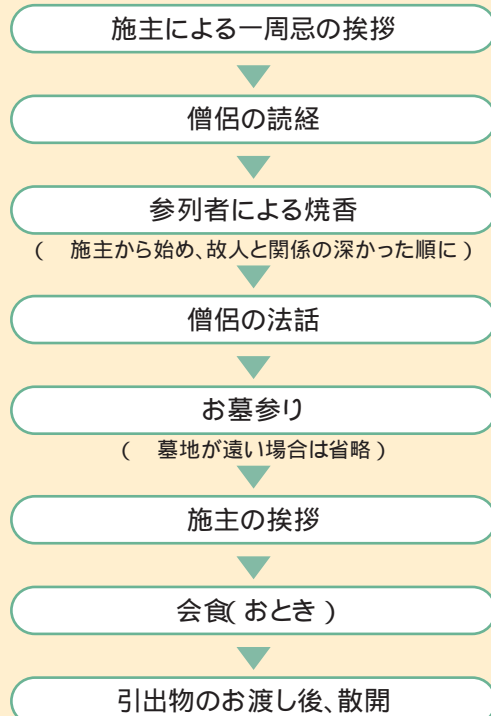
引出物をいつ渡すのか?

一周忌法要は、「僧侶の読経による法要」と、その後の「会食」という二つ構成が多いようです。通常は、以下(右)のような流れで進行していきます。参列者への引出物は、会食後のお帰りのときに渡すのが一般的です。会食の席を設けない場合には、折詰めなどの料理と酒の小壺、そして引出物を一緒にお渡しします。

法要当日の用意

当日は、花やお供物(お菓子・果物など)、お布施、引出物などを用意します。お寺によっても用意すべきものが違うので事前に確認しておきましょう。

一周忌法要の流れ



一周忌とは

亡くなられてから満一年の祥月命日(同月同日)に行う法事のこと。以降定められた年ごとに営まれる年忌供養の中でも、もっとも重要な法事として特に手厚く営まれています。一般的にこの日までが「喪中」とされ、一周忌が終わると「喪」が「あける」といい、喪の期間が終了します。

ワンポイントコラム

一周忌法要の期日

本来一周忌は命日当日に執り行いますが、最近では参加者が集まりやすい土・日曜日を選んで行う場合が多いようです。ただし必ず一周忌より前の土・日曜日を選ぶようにします。

服装

施主および親族は、喪服着用が基本です。男性はブラックスーツに黒のネクタイ、靴下も靴も黒。女性は黒無地のワンピースやアンサンブルにパールのネックレスなどで、ストッキング・靴も黒にします。



おとき(お斎)

精進料理が正式な形ですが、ホテルでの会食や仕出しなど、精進料理でない場合が増えてきました。ただ、鯛や伊勢海老などは避けたいので、予約の際に法事利用を告げ、献立の内容の確認をしておきましょう。

墓地が、まだの場合は手配を

一周忌法要と納骨を同じタイミングで行うことにした場合、お寺、墓地、石材店への手配がまだであれば、速やかに着手します。石材店に依頼してからお墓が建つまでに約1~2カ月かかるので、建墓工数も念頭に入れておきましょう。



一周忌について



亡くなられてから一年目の同月同日(祥月命日)を「一周忌」と呼びます。故人が亡くなってちょうど一年の区切りの日に、親族以外にも友人・知人を招いて盛大な法要を営み、故人を偲びます。

地域によって異なる場合がございます。

通夜から葬儀のチェック

通夜や葬儀には、いろいろなしきたりや手続きがあります。主なチェックポイントをピックアップしました。

死亡の通知			
項目	チェック	内容	備考
死亡を通知する範囲		1. 付き合いの深い親戚全般	3の場合=人事部が直属の上司あるいは同僚に連絡して、必要な範囲で知らせていただく。 4の場合=代表者に知らせて、会員に伝達していただく。 5の場合=通夜や葬儀時に世話になったり迷惑をかけたりしますので、すぐに町会長などへ連絡を。
		2. 友人・知人	
		3. 本人の勤務先	
		4. 通っていた学校やサークル、本人が関係していた団体	
		5. 隣近所など	
通知の内容		何処の誰	忘れないようにメモにとって連絡すると間違いません。
		死因と死亡時刻	
		通夜と葬儀の日時と場所	
打ち合わせ		葬儀を滞りなく行うには準備が必要です。	遺族中心に、近親者、友人、知人、近所の人の協力を得て、手順よくひとつひとつ決めていきましょう。
形式を決める		仏式 宗派によって違いがあります。	葬儀の形式は、宗教によって違います。故人が信仰していた宗教宗派の形式に従います。自分の家が属する寺院や神社、教会は、あらかじめ確認しておきましょう。
		神式	
		キリスト教式 プロテスタントとカトリックとは違います。	
喪主を決める		葬儀のすべてを決める最高責任者が喪主です。故人に代わって弔問を受ける立場なので早く決めましょう。	喪主は、故人に最もかかわりの深い人に、家族がいない場合は、故人ともっとも血のつながりの濃い方が喪主になります。
世話役を決める		すべてを任せて葬儀を取り仕切ってくれる世話役を決めます。	世話役代表には、世事に通じていて人格円満、統率力と行動力のある長老にお願いすると、受付・会計・接待係などの人選が的確でスムーズに事が運びます。
日程を決める		世話役や親族と相談して通夜・葬儀の日時と場所を決めます。(地域によっては、葬儀と告別式が別に行われるところもあります。)	一般的には、死亡当日に納棺、翌日に通夜、翌々日に葬儀・告別式です。関係者への手配、家族や遠方に住む参列者の都合、火葬場の都合によって、適切な日時にすることができます。
会場を決める		自宅	参列者のことを考慮して、できるだけ自宅から近い会場を選びましょう。
		寺社	
		教会	
		公民館	
		集会場	
		セレモニー会館	
寺社、教会への依頼		仏式の場合 菩提寺の住職に知らせます。式次第、戒名などの細かい打ち合わせが必要なので、近くの場合は訪ねたほうがいいでしょう。宗派の本山や宗務所に電話連絡して近くの同じ宗派の寺院を紹介してもらうこともできます。	菩提寺以外の寺院で行う場合は、俗名で。後日、菩提寺で戒名をつけていただきます。宗派の違う寺院の場合、戒名のつけ方も違いますので、菩提寺に葬れなくなることも。同じ宗派の寺院を選ぶことが大事です。
		神式の場合 故人が氏子だった氏神に依頼するのが原則ですが、氏子でなくても、神官に相談すれば、たいいていは引き受けてくれます。	自宅が斎場、もしくは公民館で行われます。神式では齋主、副齋主、楽員などの委託、葬具、祭具の手配などが必要です。
		キリスト教 カトリック系の教会は、信者に対してしか葬儀は行われません。	プロテスタントの教会は、信者でなくても葬儀をしてくれます。詳細は問い合わせを。
葬儀社を決める		互助会	互助会に入会している場合は、連絡すれば一切仕切ってくれます。
		故人の勤務先の組合に葬祭契約	勤務先の組合に葬祭契約があれば、少ない予算でできるので確認しましょう。
		葬儀社	葬儀のためのプロなので、宗教宗派に合わせてスムーズに行ってくれます。通夜から納棺、祭壇の飾りつけ、火葬場への連絡、霊柩車の手配はもちろん、葬儀に必要な一切を引き受けてくれます。
葬儀料金と別途料金		セット料金のランク 葬儀料金はセット料金となっていて、一号、二号などのランクがあり、予算に合わせて選べるようになっています。セット料金=祭壇と飾り付け一式、棺、納棺付帯品一式、蜀台用具、焼香用具一式、納骨の用意、各種記録帳など。	葬儀に必要なあらゆる用意(死亡届から花輪まで、必要な手配・葬儀の司会など)すべてを代行してくれますが、セット料金に入らない別途料金があります。
		別料金の確認 別料金=遺体用ドライアイス、生花、花輪、籠盛、霊柩車、タクシー、バス、会葬礼状、返礼品、遺影写真、火葬料など。	セット料金に含まれるのか、別料金になるのかは、葬儀社によって多少の違いがありますので、打ち合わせのときに確認しておきましょう。不明確だと支払いのときにトラブルの原因となります。

葬儀後の諸手続きチェック

家族が亡くなると、悲しみに浸る間もなく慣れない手続きが沢山あります。いろいろな打ち合わせや諸届けから、故人の死後の整理など。愛する方の旅立ちを心おきなく送ることができるよう、お金を受け取る手続きなどを中心にピックアップしました。

種類	死亡届	国民年金			厚生年金	健康保険	
チェック							
手続き	-	死亡一時金	寡婦年金	遺族基礎年金	遺族厚生年金	埋葬料	家族埋葬費
期間	7日以内(国外の場合は3ヵ月以内)	5年以内			5年以内	2年以内	
窓口	1.死亡者の本籍地 2.届出人の所在地(一時の滞在地を含む) 死亡した場所のいずれかの区市町村役場・支所の戸籍窓口	市区町村の国民年金課			勤務先または最終勤務先を管轄する社会保険事務所・共済組合	勤務先の健康保険組合、最終勤務先を管轄する社会保険事務所	
印鑑							
印鑑証明	-	-			-	-	
住民票	-	所帯全員(除籍の記載有り)			-	-	
戸籍謄本(抄本)	-	-			-	-	
除籍謄本(抄本)	-	謄本			謄本	-	
死亡診断書				コピーor証明書	コピー	コピーor埋葬許可証	
死亡者の年金手帳	-		夫			-	
保険証書	-	故人の年金手帳	故人と妻の年金手帳	故人と請求者の年金手帳	故人と請求者の厚生(共済)年金手帳	健康保険証	
その他		死亡一時金裁定請求書・振込先口座番号	源泉徴収票・国民年金寡婦年金裁定請求書・振込先口座番号	源泉徴収票(非課税証明書)・国民年金遺族基礎年金裁定請求書・振込先口座番号	源泉徴収票・遺族厚生年金裁定請求書・振込先口座番号	健康保険被保険者家族埋葬料(費)請求書・振込先口座番号 遺族以外が申請するときには、埋葬費用領収書が必要	
備考	届け出る人=死亡者の親族、同居者、家主、地主、家屋管理者、土地管理人後見人など(資格を証明する登記事項証明書が必要)	寡婦年金・遺族基礎年金が受けられない遺族。	老齢基礎年金を受けられるご主人が年金を受けずに亡くなったときに妻に。	加入者であるご主人が亡くなったとき、残された妻子と子に。	故人が厚生(共済)年金に加入していた場合。	退職後でも、健康保険組合を脱退して3ヵ月以内だと支給されます。	

種類	国民健康保険	労災保険		簡易保険	生命保険	銀行預金	郵便貯金	不動産
チェック								
手続き	葬祭料	葬祭料	遺族保障給付	保険金	保険金	名義変更(引き出し)	名義変更(引き出し)	所有権移転登記
期間	2年以内	2年以内	5年以内	2年以内		早急	早急	早急
窓口	市区町村の国民健康保険課、国民健康保険組合	最終勤務先		郵便局	生命保険会社	銀行	郵便局	法務局
印鑑	受給者							
印鑑証明	-	-	-	受取人		法廷相続人全員	法廷相続人全員	
住民票	-	-	-	-		-	-	
戸籍謄本(抄本)	-	-	-	受取人(抄本)		法廷相続人全員	法廷相続人全員	法廷相続人全員
除籍謄本(抄本)	-	-	-	被保険者		or故人の戸籍謄本	or故人の戸籍謄本	-
死亡診断書								
死亡者の年金手帳	-	-	-	-		-	-	-
保険証書	被保険者証	-	-			-	-	-
その他	国民健康保険埋葬費支給請求書・振込先口座番号	葬祭料(葬祭給付)請求書や賃金台帳その他各種の添付書類が必要	死亡保険金支払い請求書 受取人が複数の場合は、受取人全員分の戸籍謄本(抄本)・印鑑証明書が必要		窓口に届出する人の実印、通帳、届出印、キャッシングカード、身分証明書	法廷相続人の同意書 基本的には認められませんが、上記の書類があれば認められる場合も	登記申請書、遺産分割協議書、固定資産評価証明書などが必要	
備考	会葬礼状や葬儀社の領収書など、喪主が確認できるもの。	業務上の事故・疾病で死亡したときに、葬儀を行った者に対し。	業務上の事故・疾病で死亡したときに。		保険会社によって必要書類が違うので確認を。	金融機関が死亡事実を知った時点で、故人の遺産保持の目的で口座を停止されるので手続きは早急に。	手続きの期限は相続人が決定後、なるべく早めに。	

地域によって異なる場合がございますので、詳細については各窓口へお問合せください。各手続きには所定の請求書などがありますので各窓口へ申し出てください。